

英語の中間構文から成る総合複合語

Synthetic Compounds Derived from English Middle Constructions

柘 植 美 波

Minami TSUGE

1. はじめに

英語の主要構文とされている表現の中に、中間構文 (middle constructions) と呼ばれる構文があり、例えば (1) のような文が見られる。

(1) The book sells well.

(Jespersen (1949: 347))

(1) の形式は能動態であるが、「その本はよく売れる」という解釈を持つため、意味は受動態の要素が見られる。(1) のような中間構文から派生されたと考えられる総合複合語 (synthetic compounds) があり、(2) のような例が見られる。

(2) One of her plays, *My Funeral Tea*, is a best-seller in the United States and is also known in Australia.

(García de la Maza (2011: 172))

(2) の *best-seller* は「ベストセラーの作品」という意味を持ち、(1) の動詞 *sell* と副詞 *well* を使って派生されたと考えられる。英語に限らず、日本語でも「ベストセラー作家」というように、中間構文から派生された総合複合語が身近でも見られる。英語の総合複合語に関する先行研究は多いが、*best-seller* のような中間構文由来の総合複合語に関する研究は、数少ないように思われる。

本稿の目的は、*best-seller* などの中間構文由来の総合複合語がどのように形成されるの

かということを、従来の総合複合語に関する研究を用いて考えることである。本稿の構成は以下の通りである。第2節では英語の総合複合語に関する先行研究を概観する。第3節では、大規模コーパス British National Corpus (BNC) で収集したデータを用いて従来の中間構文由来の複合語に関する先行研究の問題点を挙げ、そのような複合語がどのように派生されるのかを提案し、第4節では結論を述べる。

2. 先行研究

英語の総合複合語は生産的であり、これまで幅広く研究されている。本節では、総合複合語に関する先行研究を紹介する。まず2.1節で、Roepers and Siegel (1978) が提案した第一姉妹の法則について取り上げ、Keyser and Roepers (1984) がその法則を用いて中間構文由来の複合語について分析した結果をまとめる。2.2節では、Lieber (1983) による素性浸透と項連結の原理を用いた分析について概観する。最後に2.3節では、2.1節から2.2節まで見てきた一連の先行研究のポイントをまとめ、それらを比較・検討する。

2.1. 第一姉妹の法則による総合複合語の形成

複合語は *lexicon* で作られるという前提がある。英語の総合複合語は *lexicon* の中で、

第一姉妹の法則 (First Sister Principle) という原理に従い、形成されたと Roeper and Siegel (1978) は提唱している。Keyser and Roeper (1984) はこの原理を用いて、中間構文から派生される総合複合語を分析している。本節では第一姉妹の法則に関する分析を概観する。

2.1.1. Roeper and Siegel (1978)

総合複合語とは「複合語の第二要素が^s-er/-ing/-ed形の動詞由来派生語で、第一要素と動詞-目的語等の文法関係で結びついている複合語と定義される」(森田 (2003: 124))。この性質より、総合複合語は動詞由来複合語 (verbal compounds) とも呼ばれる¹⁾。Roeper and Siegel (1978) (以下, R&S) は、この複合語が第一姉妹の法則によって形成されると考え、その規則を以下のように定義している。

(3) 第一姉妹の法則 (First Sister Principle)

全ての動詞由来複合語 (総合複合語) は、動詞の第一姉妹の位置にある語を編入することによって形成される。

(R&S (1978: 208))

総合複合語は (3) のような語彙変形規則により、動詞とその下位範疇化された補部から生成される。例えば、動詞 *make* の下位範疇が (4) のように示され、その動詞を派生させた複合語が (5) のように見られる。

(4) *make*: [NP] ([Adv]), etc.

(5) a. *peacemaking*

b. **quick-making* (R&S (1978: 208))

make は他動詞であり、目的語 NP を必ず取らなければならない、動詞の最も近くに置かれるため、(4) の [NP] は動詞 *make* の第一姉妹となる²⁾。Adv は動詞 *make* にとって任意の要素であり、動詞の最も近くに置かれることはないため、[Adv] は動詞の第一姉妹ではない。この (4) の下位範疇化枠を使い、(5) の複合語のコントラストを説明することがで

きる。(5a) の複合語の第一要素 *peace* は、動詞 *make* の第一姉妹の位置に置かれる目的語 NP である。従って、(5a) では動詞 *make* の第一姉妹となる要素を編入しているため、受け入れ可能な複合語となる。一方 (5b) では、複合語の第一要素 *quick* が Adv であり、動詞 *make* の第一姉妹になれない要素をとっている³⁾。従って、(3) の法則に反するため、(5b) は受け入れ不可となる。

上述のように、総合複合語は (3) の第一姉妹の法則に従って形成される。加えて、(5) の複合語と対応する文が (6) のようになると考えられ、複合語と文の受け入れ可能な度合いが一致する。

(6) a. *She makes peace.*

b. **She makes quick (ly).*

(R&S (1978: 208))

(5) と (6) の対応について (3) を用いて説明することが R&S の中心的目的となっている。このように、R&S は総合複合語の形成を説明する理論を (3) のように提案している。

2.1.2. Keyser and Roeper (1984)

Keyser and Roeper (1984) は英語の中間構文について分析し、同表現から派生される複合語について記述している。Keyser and Roeper (1984: 391-392) (以下, K&R) は、2.1.1 節で概観した R&S の第一姉妹の法則によると、中間構文から成る複合語は不適格であると論じ、(7) の例を挙げて説明している。

(7) a. *They bribe bureaucrats easily.*

[+_NP]

⇒ *bureaucrat-bribing*

b. *Bureaucrats bribe easily.*

[+_ (AdvP)]

⇒ **easily-bribing*

(K&R (1984: 392))

(7a) の他動詞 *bribe* の第一姉妹は NP であり、

目的語 *bureaucrats* を第一姉妹として取ることができるため、*bureaucrat-bribing* という語が成立すると予測できる。

一方 (7b) は、(7a) に中間構文を形成するための *middle rule* を *syntax* で適用した結果である⁴⁾。(7b) の動詞 *bribe* の第一姉妹として考えられるのは副詞 *easily* である。第一姉妹の法則に従い、その副詞を複合語の第一要素として取り、*easily-bribing* という総合複合語が成り立つと予測される。ところが、副詞 *easily* は動詞 *bribe* の第一姉妹ではなく、(7b) で示したとおり *easily-bribing* という語は実際には不適格である。(7b) のように、中間構文から複合語を派生することができないため、中間構文は *lexicon* では形成されず、*syntax* で形成されると K&R は主張している。K&R の他に、Fagan (1988) も中間構文から生成される複合語は不適格であると分析しているが、上述とは異なる理由で説明している⁵⁾。

以上より、総合複合語が形成されるためには第一姉妹の法則が適用されるが、中間構文由来の複合語についてはその法則で説明することができない。第一姉妹の法則以外に、総合複合語の派生方法を説明している分析がある。その分析について2.2節で提示する。

2.2. 素性浸透と項連結の原理による総合複合語の形成

2.1.1節で概観した R&S の第一姉妹の法則では、総合複合語の形成しか説明することができず、基本複合語 (*primary compounds*, 語根複合語) を説明することができない。Lieber (1983) は総合複合語と基本複合語の両方の派生方法を説明できるような代替案を提供している。本稿では総合複合語に関する分析を扱うため、2.2節では、Lieber (1983) による総合複合語の分析のみを概観する。

2.2.1. 素性浸透と項連結の原理

Lieber (1983) によると、英語の複合語の形成については素性浸透 (*Feature Percolation Conventions*) と項連結の原理 (*Argument-linking Principles*) という2つの原理を用いて説明できる。この原理は語彙構造の枠組みを用いたものであり、それぞれの原理について順次説明していく。

まず素性浸透とは、Vのような範疇素性が語彙構造上、枝分かれ節点あるいは枝分かれでない節点へと浸透するというものであり、4種類の *convention* が設定されている。

(8) 素性浸透 (*Feature Percolation Conventions*)

a. *Convention I*

範疇素性を含む語幹形態素の全ての素性は、その形態素を支配している最初の枝分かれでない節点に浸透する。

b. *Convention II*

範疇素性を含め、接辞形態素の全ての素性は、その形態素を支配している最初の枝分かれ節点に浸透する。

c. *Convention III*

もし枝分かれ節点が *Convention II* によって素性を得ることができなければ、その隣りの最も低いラベル付けされた節点からの素性が自動的に、ラベル付けされていない節点に上へ浸透する。

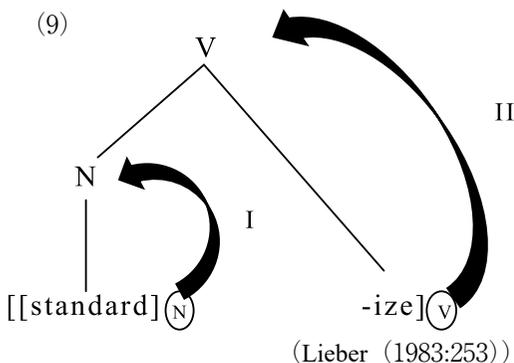
d. *Convention IV*

2つの語幹が姉妹関係であれば (すなわち、2つの語幹が複合語を形成すれば)、右側語幹の素性は、その語幹を支配している枝分かれ節点の上まで浸透する⁶⁾。

(Lieber (1983: 252-253))

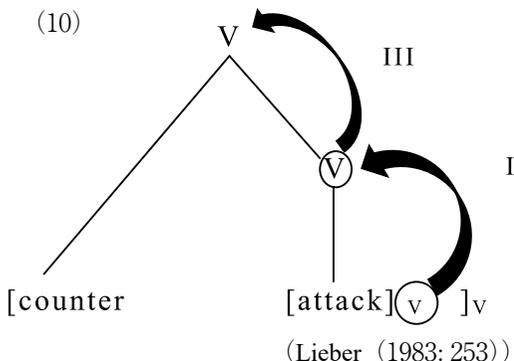
上述の *Convention* が語彙構造でどのように作用されるのかを順次説明する。例えば、動

詞 *standardize* は (9) のような語彙構造になる。



動詞 *standardize* は名詞 *standard* と接尾辞 *-ize* という2つの形態素から成る。(8a) の Convention I より, *standard* の素性 N がその形態素を支配している最初の枝分かれでない節点に上がり, 浸透する。さらに (8b) の Convention II より, 接尾辞 *-ize* の素性 V がその形態素を支配している最初の枝分かれ節点へと浸透することによって, *standardize* という動詞が成り立つ。(9) のように, Convention I と II によって派生語が形成される。

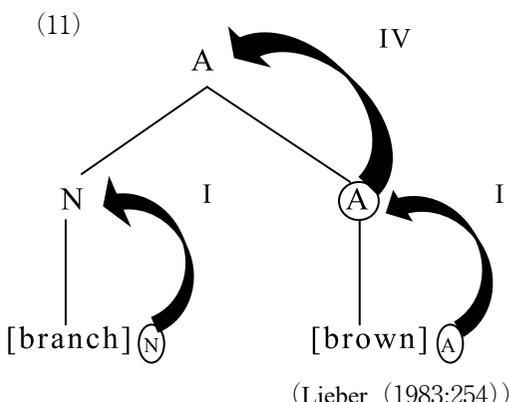
次に, Convention III について概観する。素性浸透の Convention III が作用されるのは, 接辞形態素の素性が欠如している時である。例えば, 動詞 *counterattack* は (10) のように派生される。



動詞 *counterattack* は接頭辞 *counter-* と動詞 *attack* から成る。語幹形態素 *attack* の素性 V が (8a) の Convention I より最初の枝分かれでない節点へ浸透する。接頭辞 *counter-* は動

詞や名詞, 形容詞, 副詞に自由に付加することができるため, 範疇を決めることができない。接頭辞 *counter-* のように, あらゆる語幹に自由に付加することができ, 範疇を決めない接辞形態素が複合語の形態素として存在する場合は, (8c) の Convention III の働きにより, 接辞に付加する語幹形態素が語彙構造で浸透するというものである。

加えて, 複合語が形成される際は Convention I と IV が働く。例えば, 複合語の形容詞 *branch-brown* は (11) のような語彙構造を持つ。



(8a) の Convention I より, 名詞 *branch* の素性 N と形容詞 *brown* の素性 A がそれぞれの形態素を支配している最初の枝分かれでない節点へと上がる。(11) が示すように *branch* と *brown* は姉妹関係にあり, 複合語が形成されるため, (8d) の Convention IV が働く。従って, Convention IV より, 右側にある *brown* の素性 A がその語幹を支配している最初の枝分かれ節点へ浸透し, 形容詞 *branch-brown* が形成される。範疇素性には外項と内項という項構造が含まれ, 範疇素性が語彙構造の上の方へ浸透する時はその項構造も一緒に浸透する。上述のように, 派生語と複合語が形成される時は語彙構造上, (8) の Convention によって素性が浸透し, 語が形成される。

素性浸透に加え, 項連結の原理も複合語形

成で見られる原理の1つであるとLieber (1983) は分析している。項連結の原理では、以下の2つの規則が定義されている。

(12) 項連結の原理

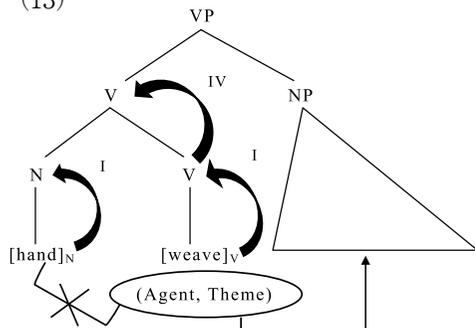
(Argument-linking Principles)

- a. []_{VP} []_a または []_a []_{VP} という構造において、V/Pは全ての内項とlinkできなければならない。
- b. もしある語幹 []_a が項を取る語幹を含む複合語の中でfreeならば、項を取る語幹のsemantic argument (Locative, Manner, Agentive, Instrumental, Benefactive) として解釈可能でなければならない。

(Lieber (1983: 258))

(12a) の *a* とはN, V, Adjなどの全ての範疇を表す。加えて(12b)のfreeとは、語幹が項を取る語彙項目によってlinkされないことを言う。さらに(12b)のsemantic argument (意味的な項)とは義務的でない項であり、Lieber (1983) は説明していないが、これは付加詞 (adjunct) に該当する。複合語において、(12)の規則は語彙構造の原理と一緒に解釈されなければならない。例えば、複合語 *hand-weave* は第二要素が項を取る場合の基本複合語のパターンであり、(13)のような語彙構造を持つ。

(13)



(Lieber (1983: 258))

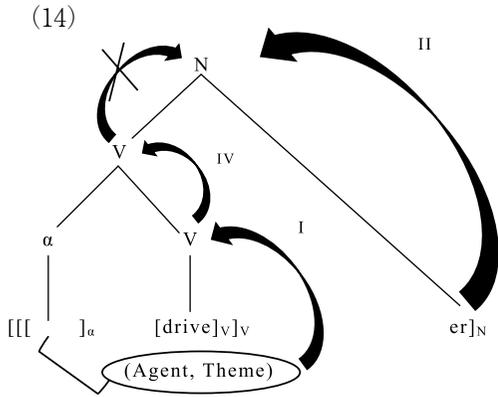
(13) の構造で、動詞 *weave* の下の丸で囲ま

れたものは、動詞の項構造を表す⁷⁾。(12a)の項連結の原理より、複合語の第二要素にある動詞 *weave* の内項Themeは複合語の外側にあるNPとlinkできなければならない。従って、(13)で図示したように、*weave* の内項Themeは複合語の外で満たされる。加えて複合語の第一要素として内項が満たされることができず、freeとなる。(12b)の項連結の原理より、freeとなった語幹は意味的な項として解釈可能でなければならない。(13)で示したように、名詞 *hand* はInstrumentalとして解釈可能であり、[]_aに入ることができる。従って、「手で編む」という意味を持つ複合動詞が形成される。

上述のように、(8)の素性浸透と(12)の項連結の原理は、英語の複合語のパターンを説明するのに大いに役に立つ。英語の複合語は主に基本複合語と総合複合語という2つのパターンに分かれるが、素性浸透と項連結の原理も双方とも2つのパターンの複合語を説明することができる。基本複合語では、(13)のような第二要素が項を取るパターン以外の語についても、(8)と(12)を使って説明することができる⁸⁾。次の節では、この2つの原理がどのようにして総合複合語の形成に適用されるのかということ論じる。以下、*-er*形と*-ing*形、*-ed*形の3つのパターンの総合複合語について順次見ていく。

2.2.2. *-er*形の総合複合語

接尾辞 *-er* は動詞に付加し、Agentを表す名詞を形成する⁹⁾。例えば、*driver* は動詞 *drive* と接尾辞 *-er* が結合され、「運転手」という名詞になる。このように、接尾辞 *-er* は名詞を形成するため、項構造は持たない。Agentiveである *-er* 形の総合複合語は(14)のような語彙構造を持ち、(15)のような複合語形成について説明ができる。



(Lieber (1983: 269))

(15) a. truckdriver

b. *green-driver

(Lieber (1983: 268-269))

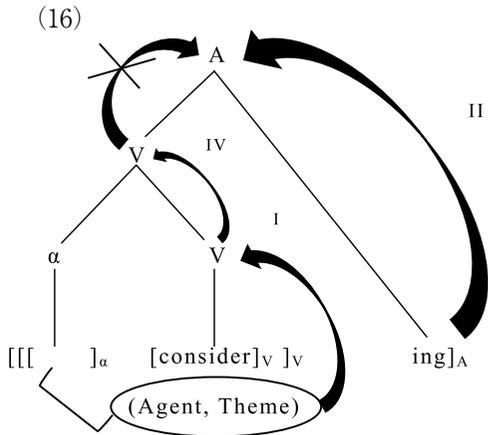
(8) の素性浸透の Convention I より, 動詞 *drive* の項構造は最初の枝分かれでない節点 V へ上がり, さらに Convention IV より最初の枝分かれ節点 V へと上がる。動詞 *drive* に接尾辞 *-er* が付加される時は, Convention II より, 接尾辞 *-er* の素性 N が最も高い枝分かれ節点へ上がる。これより, 動詞 V はさらに遠くの枝分かれ節点 N へ上ろうとすると, 範疇が N と V で異なるため, 動詞 V は最も高い枝分かれ節点へ上がることができない。加えて (12a) より, 動詞の内項は複合語の内側にある []_α で満たされなければならないため, []_α には動詞 *drive* の内項 Theme が入る。従って (15a) のように, 動詞 *drive* の内項になることができる名詞 *truck* をとり, *truckdriver* という文法的に正しい語が成り立つ。一方, (15b) のように形容詞 *green* を入れると, 受け入れ不可となる。なぜならば, 形容詞 *green* は動詞 *drive* の内項ではなく, 付加詞であるため, (14) の []_α に入ることができない。

Agentive となる *-er* 形の総合複合語は, (14) のような語彙構造を持つ¹⁰⁾。上述のように, *-er* 形の総合複合語の派生方法や受け入れ可

能か否かということ, 素性浸透と項連結の原理の2つの規則を用いて, 説明することができる。次の節では, 接尾辞 *-ing* が付加される総合複合語のパターンについて概観する。

2.2.3. *-ing* 形の総合複合語

総合複合語の2つめのパターンとして, 接尾辞 *-ing* が付加される場合が挙げられる。この接尾辞は動詞に付加され, 形容詞や名詞, 動詞の進行形を形成する。これより, *-ing* 形は幾つかの異なる範疇に属する語彙項目を形成するため, より広い構造的可能性を持つが, 接尾辞 *-ing* は項構造を持たない。本稿では, 動詞に接尾辞 *-ing* が付加され, 形容詞が形成される複合語のパターンのみ概観する。*-ing* 形の総合複合語は, (16) のような語彙構造で示され, (17) のような複合語の受け入れ可能度を判断することができる。



(Lieber (1983: 271))

(17) a. a proposal-considering task force

b. *a quickly-considering task force

(Lieber (1983: 272))

(8) の素性浸透の Convention I より, 動詞 *consider* の項構造は最初の枝分かれでない節点 V へ上がり, さらに Convention IV より最初の枝分かれ節点 V へと上がる。動詞 *consider* に接尾辞 *-ing* が付加される時は,

Convention IIより、接尾辞-ingの素性Aが最も高い枝分かれ節点へ上がる。これより、動詞Vはさらに遠くの枝分かれ節点へ上がるとうすると、範疇がAとVで異なるため、動詞Vは最も高い枝分かれ節点へ上がることができない。加えて(12a)より、動詞の内項は複合語の内側にある []aで満たされなければならないため、[]aには動詞considerの内項Themeが入る。従って(17a)のように、動詞considerの内項になることができる名詞proposalをとり、proposal-consideringという文法的に正しい語が成り立つ。一方、(17b)のように副詞quicklyを入れると、受け入れ不可となる。なぜならば、副詞quicklyは動詞considerの内項ではなく、付加詞であるため、(16)の []aに入ることができない。

2.2.2節で論じた-er形の総合複合語と同様、形容詞を形成する接尾辞-ingを持つ総合複合語は、(16)のような語彙構造を持ち、形成される複合語が受け入れ可能か否かということ、素性浸透と項連結の原理の2つの規則を用いて、説明することができる¹¹⁾。次の節では、接尾辞-edが付加される総合複合語のパターンについて概観する。

2.2.4. -ed形の総合複合語

2.2.2節で扱った-er形の総合複合語、そして2.2.3節で述べた-ing形の総合複合語と同様に、第二要素が受動分詞 (passive participles) である総合複合語、すなわち-ed形の総合複合語も非常に生産的である。ところが、ある時点で接尾辞-edは他の2つのタイプとは異なる。英語の受動分詞は、writtenやsungのように、多くの異形態 (allomorphy) を示す。従って語彙記載項目上、受身のような操作が働くことにより、接尾辞-edの項構造は以下のように示される。

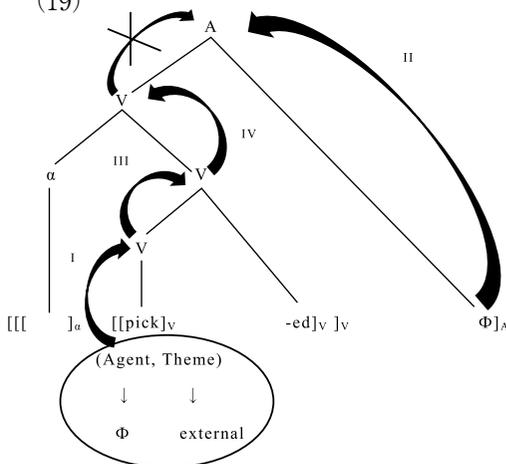
(18) external argument → Φ

internal argument → external argument

(Lieber (1983: 273))

(18)は、接尾辞-edの項構造で受身の操作が働き、動詞の外項がゼロとなり、その内項が外項に変換されるということを表す。このような操作により、接尾辞-edは独自の項構造を持ち、受動分詞を形成する。受動分詞は動詞を形成するものと形容詞を形成するものという2つのタイプに分類されているが、本稿では形容詞を形成するタイプのみ取り挙げる。上述の項構造上の受身の操作を利用し、接尾辞-edを持つ複合語の語彙構造は(19)のように示されている。加えて、(20)は受動分詞を使った複合語の例である。

(19)



(Lieber (1983: 277))

(20) a. home-picked strawberries

b. *strawberry-picked

(Lieber (1983: 277))

まず(8)の素性浸透のConvention Iより、動詞pickの項構造は最初の枝分かれでない節点Vへ上がる。動詞pickに接尾辞-edが付加される時は、Convention IIIより動詞pickの項構造が最初の枝分かれ節点Vへと上がり、(19)の項構造は(18)の受身の操作を受ける。この受身の作用を受けることにより、動詞pick

の外項 Agent がゼロとなり、内項 Theme が外項になる。このように動詞の項構造が変換されることによって、受動分詞 *picked* が形成される。さらに [] *a* と結合される時は、Convention IV より、受動分詞 *picked* の項構造が上がる。形容詞を表す受動分詞になる時は、ゼロ接辞付加 (転換) が働くことによって、動詞から形容詞へ範疇が変換される¹²⁾。ゼロ接辞付加が起こる時は Convention II より、接尾辞 ϕ (ゼロ) の素性 A が最も高い枝分かれ節点へ上がる。これより、動詞 V はさらに遠くの枝分かれ節点 A へ上がろうとすると、範疇が A と V で異なるため、動詞 V は最も高い枝分かれ節点へ上がることができない。このようにして、形容詞を表す受動分詞が形成される。

接尾辞 *-ed* からの受動の操作によって、動詞 *pick* の内項は外項に変換されたため、動詞の内項は複合語の内側にある [] *a* で満たされることができない。それゆえ (12b) より、複合語の第一要素 [] *a* は *free* となり、semantic argument が入る。(20a) の複合語の第一要素 *home* は、「家で」と解釈することができ、Location を表す項であるため、動詞 *picked* の semantic argument になる。従って、(12b) の項連結の原理を満たすため、*home-picked* という複合語が成り立つ。一方、(20b) の第一要素 *strawberry* は動詞 *pick* の内項であるため、(19) の [] *a* に入ることができない。これより、(20b) は項連結の原理を満たすことができないため、受け入れられない複合語となる。

接尾辞 *-er* と *-ing* に加え、受動分詞を形成する接尾辞 *-ed* が付加される複合語についても、素性浸透と項連結の原理によって説明ができる。英語の総合複合語は、豊富で新語が形成されることが多いが、上述のように、素性浸透と項連結の原理を用いて、形成される

複合語が適格か否かを予測することができる。しかしながら、Lieber (1983) は中間構文から派生される複合語について分析していない。

2.3. まとめ

本節で扱った、総合複合語及び中間構文から派生される総合複合語に関する先行研究のポイントをここでまとめる。これまでの研究で明らかにされていることは4つある。

まず、英語の総合複合語は第一姉妹の法則によって形成されるが、中間構文から派生される複合語に関してはこの法則では説明ができない。2.1節で取り挙げたように、第一姉妹の法則に関しては R&S が提案しているが、K&R によると、中間構文由来総合複合語では第一姉妹の法則を満たすことができず、当該構文から複合語を派生することができない。

2つ目は、2.2節で示したように、Lieber (1983) の素性浸透と項連結の原理によって、あらゆる英語の複合語の派生方法を説明することができ、形成される複合語が適格か否かを予測することができる。第一姉妹の法則で説明できなかった複合語のパターンについても、この2つの原理を用いると説明ができる。ところが、第一姉妹の法則では説明できないと考えられる、中間構文由来の総合複合語について述べられていない。

3つ目は、総合複合語形成において、動詞の項構造が重要な役割を果たすということである。2.1節の第一姉妹の法則と2.2節の素性浸透と項連結の原理のどちらの原理においても、項構造を用いて説明されている。Lieber (1983) が提示した受動分詞 *-ed* 形の複合語形成方法では、動詞の語彙記載項の中で受身の操作が働き、項構造が変換される。受身の作用を受けた動詞の内項が外項になることに

よって、複合語の第一要素には内項が入らないということが説明できる。

4つ目は、Adv-V-er形とAdv-V-ing形の総合複合語は許されないということである。2.1節のK&Rは、中間構文由来のAdv-V-ing形の複合語が第一姉妹の法則を満たすことができないと述べている。それに加え、2.2節のLieber (1983)は語彙構造を提示しながら、素性浸透と項連結の原理を用いて、動詞の付加詞を複合語の第一要素とするようなAdv-V-er形とAdv-V-ing形の総合複合語は派生されないと述べている。従来の先行分析に従うと、中間構文由来の複合語とされる *best-seller* や *best-selling* は受け入れ不可能な複合語のタイプに該当すると考えられる。しかし、*best-seller* や *best-selling* は実際に使われている複合語であるとされている。そのような中間構文から成る複合語がどのように形成されたのかということが明らかにされていないため、今後検討すべき点であると思われる。

3. 提案

前節でまとめた先行研究より、中間構文から派生されたと考えられる総合複合語は幾つかの規則を用いて説明することができず、派生過程においてもまだ明らかにされていない。それに伴い、中間構文由来の複合語の存在についても曖昧な点である。本節では、中間構文由来の総合複合語に関する実例とその複合語の派生方法に関する提案を挙げる。まず3.1節で、大規模コーパスBritish National Corpus (BNC) で収集した同表現を分析し、従来の先行研究の分析が正しいのかどうかを考察する。そして、3.2節ではLieber (1983)が提示した複合語の語彙構造が、中間構文由来の複合語ではどのようになるのかを考え、一部修正し、提案を述べる。

3.1. データ分析

中間構文から派生されたと考えられる総合複合語をBritish National Corpus (BNC) と呼ばれる1億語の大規模コーパスで検索した。その結果、中間構文由来の総合複合語の例が見られた。ここで集めた例を分析し、従来の分析、特にLieber (1983)の語彙構造による分析が正しいかどうかを検証する。中間構文由来の複合語はAdv-V-er形の名詞とAdv-V-ing形の形容詞に限定する。

まず、Adv-V-er形について取り挙げる。その中で、中間構文由来の複合語の典型的な例とされる *best-seller* が最も多く見られた。複合語 *best-seller* は物を表す名詞と人を表す名詞として使われ、2つのパターンがあると考えられる。その例を以下に示す。

(21) In the Seventies and early Eighties the general opinion was that for women to ‘make it’ they had to act like men but now the rules are different, says author Sally Helgerson in her recently published bestseller *The Female Advantage: Women’s Ways of Leadership*.

(BNC: G32)

(22) I want to be a best-seller. Ever since I won a short-story competition some years ago I’ve wanted to write for magazines.

(BNC: EFG)

(21)の複合語 *bestseller* は「よく売れた本」と解釈できるため、物を示す名詞として分類できる。一方、(22)の複合語 *best-seller* は、「ベストセラー作家」という意味を持つため、人を表す名詞である。このように、*best-seller* には2つのパターンが見られる。収集した例では、(21)のような物を表す名詞のパターンが多く見られた。なぜこのような2つのパターンに分かれるのかどうかは明らかにされていない。Lieber (2005)によると、接尾辞

-erには多義性が見られる。例えば、「作家」という意味を持つ *writer* のように動作主を示す場合もあれば、「揚げられるもの、フライ用の若鶏」という意味を持つ *fryer* のように被動作主あるいは主題を示す場合もある¹³⁾。従って、特殊な例として考える必要はないように思われる。しかしながら、物を表す *best-seller* の例が実際に多く見られたという点より、物を表す名詞から人を表す名詞へというように、意味が拡張されたと考えられる。どのように *best-seller* の意味が拡張されたのかということは明らかにされていないため、今後検討する。

次に、Adv-V-ing形の形容詞について提示する。その中でも *best-selling* の例が数多く見られた。*best-selling* も *best-seller* と同様、2つのパターンが見られた。

(23) Best-selling books, magazine articles and newspaper columns publicized his ideas.
(BNC: AHV)

(24) Best-selling novelist Catherine Cookson, the queen of romantic fiction, becomes a dame.
(BNC: CBF)

(23) の *best-selling books* は「よく売れている本」と解釈できるため、*best-selling* は物を修飾する形容詞であると考えられる。一方、(24) の *best-selling novelist* は、「よく売れている小説家」という意味を持つため、人を表す名詞を修飾する形容詞である。このように、*best-selling* には2つのパターンが見られる。収集した例では、(23) のような物質名詞を修飾する形容詞のパターンが数多く見られた。*best-selling* においても、なぜこのような2つのパターンに分かれるのかどうかは明らかにされていない。物質名詞を修飾する形容詞 *best-selling* の例が実際に多く見られたという点より、物を表す名詞の他にも、人を表す名詞も修飾できるような形容詞になったと考

えられる。すなわち、*best-seller* と同様、「物から人へ」というように意味が拡張されたと考えられる。今後の課題として、どのように *best-selling* の意味が拡張されたのかを考えた

い。また、複合語 *best-selling* 以外にも、Adv-V-ing形の中間構文由来複合語が見られた。その例は以下の通りである。(25) と (26) は、それぞれaの文が中間構文から派生されたと考えられる複合語であり、bはaの基の中間構文と考えられる例を示す¹⁴⁾。

(25) a. In its two years of existence, Charterail has tried to demonstrate that the railways could be used not only for bulk freight such as coal, aggregates and steel, but were also flexible enough to shift fast-selling consumer goods efficiently. (BNC: CBW)

b. MALCOLM LEVENE'S 100 per cent cotton gingham shirts are selling fast.
(BNC: ECT)

(26) a. Thus, the symbol for easy-reading historical and period novels would be F8a. (BNC: H99)

b. Love stories read easily.

(García de la Maza (2011: 161))

(25a) の *fast-selling* は「早く売れる」という意味を持ち、(26a) の *easy-reading* は「簡単に読める、多読用の」という意味を持つ。(25a) と (26a) の両方とも、物を表す名詞を修飾する形容詞である。*best-selling* 以外の Adv-V-ing形の複合語では、人を表す名詞を修飾する形容詞は見られなかった。

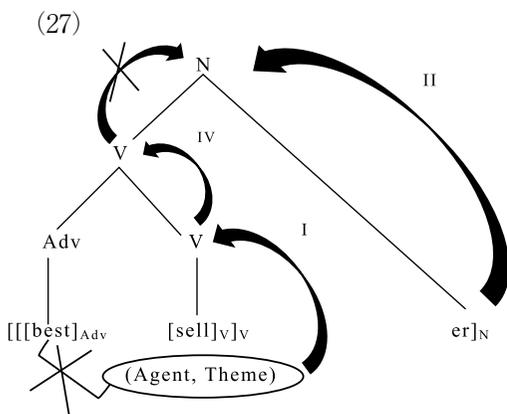
データ分析の結果、中間構文から成る Adv-V-er形の名詞と Adv-V-ing形の形容詞は実際に存在するということがわかる。この事実より、「中間構文から成る複合語が形成されない」という K&R の分析と「Adv-V-ing形

の複合語は許されない」というLieber (1983)の分析には問題があるように思われる。*best-seller*や*best-selling*のような総合複合語はどのように派生されるのかということを、次の節で論じる。

3.2. 中間構文由来総合複合語の語彙構造と派生方法

中間構文から成る複合語の派生方法については、従来の先行研究で明かされてきていない。3.1節のデータ分析より、中間構文由来の総合複合語が実際に見られるため、そのような複合語は例外ではないと考えられる。本節では、Lieber (1983)の素性浸透と項連結の原理を使って、同表現から成る複合語の語彙構造と派生方法を考える。本稿では、Adv-V-er形の名詞*best-seller*の語彙構造のみ示す。

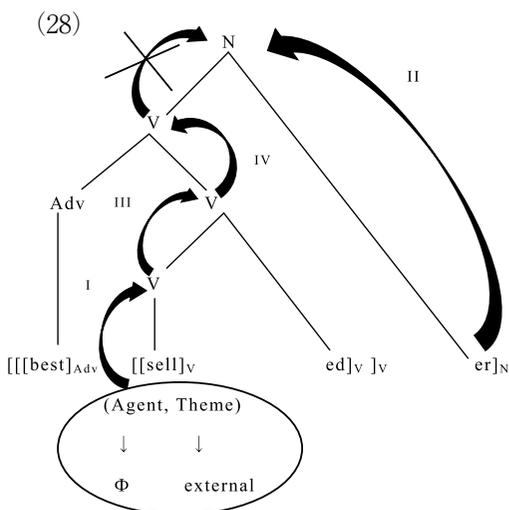
まず、Lieber (1983)が示した接尾辞-er形の名詞に関する語彙構造に従うと、*best-seller*の語彙構造は(27)のようになる。



(8)の素性浸透のConvention Iより、動詞*sell*の項構造は最初の枝分かれでない節点Vへ上がり、さらにConvention IVより最初の枝分かれ節点Vへと上がる。動詞*sell*に接尾辞-erが付加される時は、Convention IIより、接尾辞-erの素性Nが最も高い枝分かれ節点へ上

がる。これより、動詞Vはさらに遠くの枝分かれ節点Nへ上がろうとすると、範疇がNとVで異なるため、動詞Vは最も高い枝分かれ節点へ上がることができない。加えて(12a)に従い、動詞の内項は複合語の内側にある[]*a*で満たされなければならない。ところが、副詞*best*は付加詞であるため、本来ならば[]*a*に入ることができず、受け入れ不可能な語として判断されるが、実際に*best-seller*という語は存在する。これより、Lieber (1983)が示した接尾辞-erに関する語彙構造では、中間構文から成る複合語について説明ができず、不十分であると考えられるため、修正が必要となる。

ここで筆者は、中間構文には受身の意味が含まれているという特徴を活用し、(27)の語彙構造に受動分詞を形成する接尾辞-edを加えることを提案する。その受動分詞の要素を加えた語彙構造を(28)で示す。



まず(8)の素性浸透のConvention Iより、動詞*sell*の項構造は最初の枝分かれでない節点Vへ上がる。動詞*sell*に接尾辞-edが付加される時は、Convention IIIより動詞*sell*の項構造が最初の枝分かれ節点Vへと上がり、(28)の項構造は(18)の受身の操作を受ける。こ

の受身の作用を受けることにより、動詞 *sell* の外項 Agent がゼロとなり、内項 Theme が外項になる。このように動詞の項構造が変換されることによって、受動分詞が形成される。さらに [] *a* と結合される時は、Convention IV より、受動分詞 V の項構造が上がる。名詞を形成する接尾辞 *-er* が付加される時は、Convention II より、接尾辞 *-er* の素性 N が最も高い枝分かれ節点へ上がる。これより、動詞 V はさらに遠くの枝分かれ節点 N へ上がろうとすると、範疇が N と V で異なるため、動詞 V は最も高い枝分かれ節点へ上がることができない。

加えて、接尾辞 *-ed* からの受動の操作によって、動詞 *sell* の内項は外項に変換されたため、動詞の内項は複合語の内側にある [] *a* で満たされることができない。それゆえ (12b) より、複合語の第一要素 [] *a* は free となり、semantic argument が入る。best は「良く」という Manner 解釈を持つ付加詞であるため、項連結の原理を満たすことができる。

従って、best-seller は (28) のような語彙構造を持ち、素性浸透と項連結の原理によって派生されたのではないかと考える。形容詞 best-selling についても (28) と同様の構造で説明ができる。しかしながら、語彙構造上、“[sell]v ed]v]v er]N” というような表示は許可されるのかどうかということが問題になる。この表示が許可されるのかどうかを検証しなければならないが、(28) のように受動分詞の働きを語彙構造に加えると、項連結の原理によって説明することができる。

4. 結び

データ分析より、中間構文から成る Adv-V-ing 形と Adv-V-er 形の総合複合語は認可されうる。Lieber (1983) の素性浸透と項連結

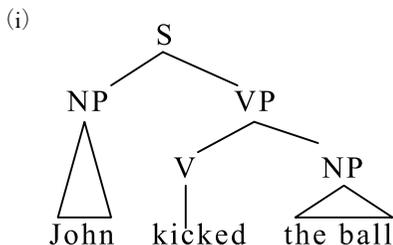
の原理より、中間構文由来の複合語の形成を説明することができるが、動詞の項構造において受動分詞の働きが必要であると考えられる。これより、動詞の項構造が語形成において重要な役割を果たすと思われる。

今後の課題としては、中間構文由来の総合複合語の第二要素となる動詞が、語彙構造上、受動分詞の形として明示されることが許可されるのかどうかを考えることを挙げる。中間構文は受身の意味を持つため、同表現から成る総合複合語に見られる動詞も受身の意味が含まれると考えられるため、この特徴を暗示的に示すことができるような表示方法を考える。また、複合名詞 best-seller には物を表す名詞と人を表す名詞という2つのパターンがあり、複合形容詞 best-selling においても物を修飾するものもあれば、人を修飾するものもあるため、意味の拡張が見られる。この意味の拡張については、Lieber (1983) の項連結の原理以外のシステムが作用されると考えられる。中間構文由来の総合複合語で見られる意味の拡張について、どのように説明するのかを今後分析する。

注

* 本稿は、筆者が2018年3月3日に「JACET 英語語彙・英語辞書・リーディング研究会合同研究会」で発表した内容を、加筆、修正させたものである。

- 1) R&S は総合複合語を動詞由来複合語という語を使って紹介しているが、本稿では総合複合語という名で示す。
- 2) 第一姉妹とは、VP に直接支配される要素の中で動詞のすぐ右側に現れる要素のことである。例えば、John kicked the ball という文の統語構造は以下の通りである。



(i) より、V *kicked* を直接支配している最初の枝分かれ節点はVPである。加えて、そのVPは動詞*kicked*の他にNP *the ball*も直接支配している。NP *the ball*はV *kicked*と同じVPに支配され、動詞のすぐ右側に生じるため、そのNPはV *kicked*の第一姉妹となる。

3) **quick-making*の第一要素*quick*は、形容詞として捉える者もいるが、総合複合語(動詞由来複合語)の第一要素に置かれる修飾語(動詞の項にならない語)は、意味的にも形態論的にも副詞であると考えられる。全てのVPの副詞は接尾辞*-ly*を持たず、*lexicon*でリストされているとSugioka and Lehr (1983: 295)は分析している。Sugioka and Lehr (1983)は(i)の規則を提案し、*-ly*は複合語の構造に起こるのではなく、句構造に現れるという事実を説明している。

(i) *-ly*挿入規則

*-ly*を [[x] _] に挿入する。

XはVP/APによって支配されるVの姉妹である。

(Sugioka and Lehr (1983: 294))

例えば、複合語*quick-thinker*の基底文は、*He thinks quick*であると考えられる。そして、その複合語の基底文に*-ly*挿入規則を適用した結果が*He thinks quickly*である。この規則はsyntaxで作用される。従って、基の副詞*quick*は接尾辞*-ly*を持たずに複合語で現れるが、句として現れる時は*-ly*付加規則が適用され、*think quickly*となる。この分析より、複合語の第一要素として現れる修飾語は副詞としてラベル付けされる。

4) K&Rはmiddle ruleを(i)のように定義し、(ii)の文を用いて説明している。

(i) a. [NP, S]はθ-roleを受け取らない。

b. [NP, VP]はVPの中でcaseを受け取らない。

(ii) NP Aux *bribe* *bureaucrats* *easily*.

(K&R (1984: 401))

(i) より、(ii)の主語NPにθ-roleが与えられず、目的語*bureaucrats*はVPの中でcaseを受け取らない。そして、目的語*bureaucrats*は動詞*bribe*によってθ-roleが与えられ、その目的語はcaseを受け取るために、主語NPへ移動する。この過程より、*Bureaucrats bribe easily*という中間構文が形成される。

5) (7b)の**easily-bribing*は複合語ではなく、gerundive adjective(動詞形状形容詞)という統語的な句であるとFagan (1988)は指摘する。gerundive adjectiveとは、event(事象)を示し、永続的な特徴を示さないという句であり、(i)のようなものが該当する。

(i) the rapidly revolving gears

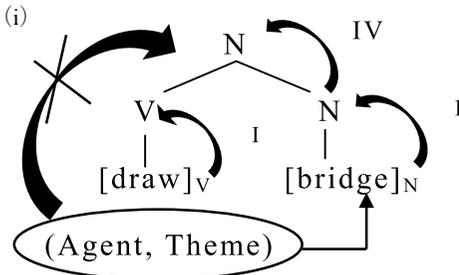
(Fagan (1988: 186))

中間構文はnoneventiveであり、eventを示すというgerundive adjectiveの条件に合わないため、中間構文から複合語が派生されないという考えもある。

6) 素性浸透のConvention I, II, IIIは言語間で共通の語形成原則であり、どの言語でも同じように適用されるが、Convention IVのみ個別言語に特有の原則である。英語の複合語の主要部は右側の要素であるため、複合語が形成される場合は右側の素性がConvention IVによって浸透する。英語以外に、右側の素性が浸透する言語として日本語やドイツ語が挙げられる。これらの言語と対照関係にあるのがベトナム語やタイ語であり、複合語の主要部が左側の要素になる。言語間で複合語の主要部の位置が異なるため、Convention IVによって浸透する素性も異なる。

7) Lieber (1983)は動詞の項構造を下位範疇の枠組みで示し、説明している。(13)の図にある項構造“(Agent, Theme)”は、筆者が加筆したものである。本稿で示す語彙構造では、動詞の項構造を意味役割(θ-role)で示す。

8) 第一要素が項を取る場合の基本複合語についても、(8)の素性浸透と(12)の項連結の原理を使って説明できる。例えば、「跳ね橋」を示す基本複合語*drawbridge*は、(i)のような語彙構造を持つ。



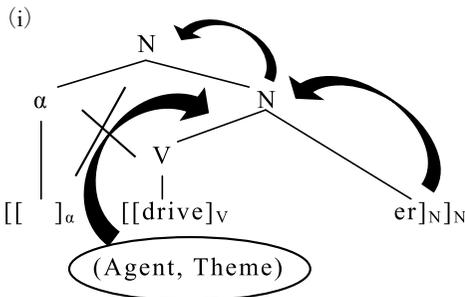
(12a) の項連結の原理より、複合語の第一要素にある動詞 *draw* の Theme は内項と link できなければならない。構造上、動詞の素性は左側から上の方へ上がってはならない。従って (i) で示したように、*draw* の内項 Theme は複合語の第二要素 N で満たされ、目的語を取る。これより、素性浸透と項連結の原理の条件を満たし、*drawbridge* が形成される。

- 9) 接尾辞 *-er* は名詞に付加することもでき、(i) のような複合語が見られる。

(i) *banker, teenager, villager, Londoner*
(森田 (2003: 47-48))

名詞に付加される場合も Agent を示す複合語になる。本稿は総合複合語 (動詞由来複合語) についてのみ取り挙げる。

- 10) Lieber (1983) によると、Agent を示す *-er* 形の総合複合語は (14) のような語彙構造に加え、もう一種類の語彙構造も考えられる。その語彙構造は以下のようなものである。



(Lieber (1983: 268))

(i) は動詞 *drive* に接尾辞 *-er* が付加された後に [] α と結びつけられるパターンであり、基本複合語に似た構造となる。(i) のような構造の場合、動詞 *drive* の項構造が最初の枝分かれ節点へ浸透することができない。この構造で [] α に動詞 *drive* の内項となる *truck* を入れると、「トラックを所有する運転手」や

「トラックがプリントされたシャツを着ている運転手」などのような解釈を持つ複合語が形成される。すなわち、基本複合語のような総合複合語の場合、(i) のような語彙構造を持つ。「トラック運転手」という意味の複合語の場合は (14) のように表される。

- 11) 形容詞を形成する接尾辞 *-ing* が付加される複合語は、(16) の他にもう一種類の語彙構造が考えられると Lieber (1983) は述べている。その語彙構造は、注10の (i) で示したようなものである。注10の接尾辞 *-er* を *-ing* に置き換えたものであり、基本複合語の解釈を持つパターンとなる。例えば、複合語 *prize-drawing* の場合、「賞をもらうような絵」という解釈を持つ。本稿では、総合複合語に関する研究であるため、詳しい語彙構造については省略する。
- 12) 転換 (*conversion*) とは、ある語彙項目の形を変えずに、範疇を変える語彙プロセスのことである。本稿では Lieber (1983) に従い、転換をゼロ接辞付加と同様に扱う。Lieber (2005) によると、転換はゼロ接辞派生として分析する研究者もいれば、範疇変化としての分析する研究者もいる。これより、転換はゼロ派生よりも範疇を他の範疇として再登録する過程でもあると Lieber (2005) は述べている。
- 13) Lieber (2005) によると、接尾辞 *-er* は動作主や被動作主以外にも、様々な解釈ができる。例えば、*hearer* は「耳に入ってきた人」というように経験者として解釈ができたり、*thriller* は「ぞくぞくさせるもの」という意味を持つため、刺激を表すというように分析されている。
- 14) (25b) と (26b) の中間構文については、3つの基準に合わせて同表現の特徴を表しているかどうかを確認している。1つ目は *implicit agent* が含まれるということ、2つ目は副詞が存在するという、そして3つ目は総称的な文であるということである。

参考文献

- Botha, Rudolf P. (1984) *Morphological Mechanisms*, Pergamon Press, Oxford.
Fagan, Sarah M. B. (1988) "The English Middle,"

- Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- García de la Maza, Casilda (2011) "The semantics of English middles and pseudo-middles," *Morphosyntactic Alternations in English*, ed. by Pilar Guerrero Medina, 161-181, Equinox, London.
- Jespersen, Otto (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles Part III*, George Allen and Unwin, London.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Lieber, Rochelle (1983) "Argument Linking and Compounds in English," *Linguistic Inquiry* 14, 251-285.
- Lieber, Rochelle (2005) "English Word-Formation Processes: Observations, Issues, and Thoughts on Future Research," *Handbook of Word-Formation*, eds. by Pavol Štekauer and Rochelle Lieber, 375-427, Springer, Dordrecht.
- 森田順也 (2003) 『語の構造と意味』 昇学出版 名古屋.
- Roeper, Thomas and Muffy E. A. Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds," *Linguistic Inquiry* 9, 199-260.
- Sugioka, Yoko and Rachel Lehr (1983) "Adverbial -ly as an Inflectional Affix," *Papers from the Parasession on The Interplay of Phonology, Morphology, and Syntax*, eds. by John F. Richardson, Mitchell Marks and Amy Chukerman, 293-300, Chicago Linguistic Society, Chicago.

コーパス

British National Corpus (BYU-BNC) :

<http://corpus.byu.edu/bnc/>